様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７０１２７

研究課題名（和文）「満洲国」中国人作家の日本における文学経験――女性作家・梅娘を中心に

研究課題名（英文）Literature experience of a Chinese writer from Manchukuo in Japan: The case of woman writer Mei Niang

研究代表者
羽田　朝子（HANEDA, ASAKO）

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：９０５８１３０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、満洲国の女性作家・梅娘の日本における文学経験に着目し、彼女が日本滞在期にモダン文化と総動員体制が並存する文化的環境に置かれるなか、多数の日本文学に触れ、日本社会で形成されていた近代女性像に共感していたことを明らかにした。そして梅娘が日本の帝国主義と近代性に向き合うなかで、中国知識人としてのアイデンティティを強めていく過程を解明した。
これにより中国文学における日中交流史を補完するとともに、それまで一面的な理解に偏ってきた被占領国作家の占領国体験について、豊富な読書経験、女性観の形成、近代体験と民族主義の相克、それによる民族アイデンティティの強化といった多様な要素を見出した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the literature experience of Mei Niang, a Chinese woman writer, in Japan. It points out that through her exposure to a considerable amount of Japanese literature during her stay in Japan, she began to sympathize with the image of the modern woman created in Japanese society wherein modern culture coexisted with the general mobilization system. It also clarifies how she gained a distinct identity as a Chinese intellectual while confronting the imperialism and modernity of Japan.
This study thereby complements the history of the Japan-China interchange in China's literary world and identifies the various dimensions of the experiences of the writer from the occupied nation in the occupying nation.

研究分野：中国文学

キーワード：梅娘　満洲国文学　日本体験

１．研究開始当初の背景

日本の占領下で活動した中国人作家については、戦後の中国の研究界では「漢奸（売国奴）」とされ、その文学は研究する価値のないものとみなされた。日本においても、戦前の日本の植民地政策に深く関わる領域であるために忌避され続けてきた。そのため満洲国の中国人作家についても長らく注目されることはなかった。その後、1980 年代にアメリカの研究者 Edward M. Gunn（耿徳華）が満洲国文学を中国現代文学の一領域として大きくとりあげたのを契機に、日中両国で満洲国文学の捉え直しが始まることとなった。こうした再評価のなかで、とりわけ注目されている作家が梅娘（メイニャン、1916 年生～2013 年没）である。その文学は、日本の植民地支配を受けながらも、女性を抑圧する男性中心社会に対する批判を描いたとして高く評価された。

満洲国の中国人作家は日本滞在の経験を持つものも多く、梅娘も 4 年間（1937～42 年）にわたって日本に滞在したとされてきた。そしてこの日本滞在期に短編集『第二代』（1940 年）を出版したことにより、作家としての地歩を固めている。しかし現在の研究界でも満洲国の中国人作家の日本との関わりについて研究することはタブー視されており、その日本における文学経験についても、ほとんど検討されてこなかった。そのため梅娘の日本経験についても、戦時下における暗い時代を目の当たりにしたということ以外、深く検討されていない状況であった。また梅娘が晩年の回想録のなかで積極的に自らの日本での経験について語っていることから、これに基づいた研究があるものの、当時の基礎的な文献調査が十分に行われていないため、資料的な裏付けがなく、真偽が疑わしい点も数多く存在していた。

２．研究の目的

本研究では、従来注目されてこなかった満洲国の中国人作家の日本における文学経験について検討したものである。とくに梅娘の文学が日本滞在を経て大きく飛躍し、その文学の特色である民族主義と女性意識を強く打ち出すようになったことに着目し、これが日本滞在期にいかに構築されていったのかを解明することを試みた。

具体的には、梅娘の日本滞在期の文学活動について基礎調査を行い、その全貌を踏まえた上で、日本における読書経験、女性観の形成、文学における日本イメージについて検討した。これにより、梅娘が日本でどのような文学経験を積み、それが梅娘にどのような影響を与え、その民族主義や女性意識を構築していったのかを明らかにすることを目指した。

こうした検討を通じて、従来の研究では一面的な理解に陥っていた被占領国作家の占領国体験の多様性を検討し、ポストコロニアルの視点から満洲国文学を捉えなおすことを最終的な目的とした。

３．研究の方法

研究の方法としては、以下の五つから構成される。

一つ目は、『大同報』の基礎調査である。梅娘の日本における主な文学活動の場のひとつであった『大同報』について、マイクロフィルムを使用し、その基礎調査を行った。とくに梅娘が活躍していた時期（1936～1941 年）の文藝欄を中心に閲覧し、編集者や特集、同時期に活動していた同人たちやその作品について大まかに分析し、その概要を把握した。それとともに梅娘の作品を網羅的に収集し、その作品の読解・分析を行った。

二つ目は、梅娘の日本における読書経験についての検討である。梅娘は日本滞在期や帰国後において、日本文学の翻訳を多数行っていることから、これら翻訳作品を通じ、日本滞在期の読書経験を考察した。まず梅娘の翻訳作品を網羅的に収集し、さらにその底本を確定する作業を行った。その上でこれらの作品が当時の日本においてどのような意味をもつものであったのかを検討した。そしてこうした検討を通じて、日本滞在期に梅娘がどのような文化的環境にあったのかを考察した。

三つ目は、梅娘の女性観の形成についての検討である。梅娘の日本における読書経験のうち、とくに女性をモチーフにした文学作品である石川達三『母系家族』や細川武子『女学生記』に着目した。同時に梅娘の日本女性に関する論説とも考え合わせながら、これらが梅娘の女性観の形成にどのような影響を及ぼしたのかについて検討した。

四つ目は、梅娘文学における日本イメージについての検討である。梅娘は日本滞在期から帰国後において、日本を描いた作品を複数発表していることから、これらの作品を収集・読解し、そこに表出している日本イメージについて分析を行った。その際には、まずは満洲国作家の日本をモチーフにした作品を広く収集し、そのなかで梅娘の描く日本がどのような特殊性をもったものであるのかを踏まえた上で検討をおこなった。

五つ目は、梅娘以外の満洲国知識人の日本経験と日本イメージについての検討である。梅娘と同時期に日本に滞在した満洲国作家である但娣（1916 年生～92 年没）や満洲国留学生の日本経験やその日本認識について検討した。これらと梅娘の事例とを比較することで、その特殊性と普遍性を明確化し、梅娘に対する考察を相対化した。

以上の研究を進めるにあたって、とくに着目したのは、梅娘が日本に滞在した時期の複雑な時代性である。当時、日本は日中戦争が始まり社会全体が総動員体制に呑みこまれる過程にあったものの、都市を中心に昭和モダンと呼ばれる消費文化が最後の光芒を放

った時代でもあった。とくに梅娘は日本滞在中、日本でも近代化の進んだ阪神間に居住しており、そのモダンな生活様式を経験している。従来の研究では梅娘の日本における近代体験について着目することはなかったが、本研究ではこれが梅娘に大きな影響を与え、その文学や精神に多様性や複雑性をもたらした可能性が高いと考えており、これを踏まえた上で一連の検討を行った。

４．研究成果

本研究では、梅娘の日本滞在期における文学活動の全体像をとらえるとともに、彼女が日本においてモダン文化と総動員体制が並存する複雑な文化的環境のなかに置かれていたことを明らかにした。その中で梅娘が多数の日本文学に触れ、また日本社会で形成されていた近代女性像に共感していたことを指摘した。そして日本の近代性と向かい合い葛藤するなかで、中国知識人としてのアイデンティティを強めていく過程を解明した。

これにより中国文学における日中交流史を補完するとともに、それまで一面的な理解に偏ってきた被占領国作家の占領国体験について、ポストコロニアルの視点から捉えなおし、豊富な読書経験、国家を超えた女性観の形成、近代体験と民族主義との相克、それによる民族アイデンティティの強化といった多様な要素を見出した。

以下、その詳細を述べる。

（１）『大同報』における文学活動

①『大同報』に対する基礎調査を行い、その文藝欄の全体像と梅娘の日本滞在期における文学活動を整理し、以下の点を明らかにした。

『大同報』は 1932 年に創刊された当初、文藝については旧文学が掲載されるにすぎなかったが、その後 1933 年に文藝欄「大同倶楽部」が開設されると、新文学が掲載されるようになった。そして 1936 年に文藝欄「文藝」が設置されると、ここに満洲国の代表的な作家が集まり、同紙の文藝欄の最盛期を迎えることになる。梅娘が最初に『大同報』文藝欄に登場するのもこの時期である。梅娘の活動時期は 1936 年 9 月～1941 年 10 月までであり、断続的に散文や小説、翻訳を全 42 篇発表している。これまで初出が不明であった梅娘の単行本『第二代』の収録作品全 11 篇のうち 7 篇もここに含まれる。こうした『大同報』文藝欄における梅娘の文学活動をたどることによって、従来曖昧な点のあった梅娘の日本滞在の時期が、1938 年末～1941 年末前後であったことが明らかになった。

梅娘は『大同報』で 1936 年から 37 年の間に誌上の投稿募集「満洲帝国国民文庫」で 3 度入賞し、また 1938 年に連載された数々の文学特集「文学専頁」で活躍するなど、作家としてのキャリアを積んでから日本に向かっている。日本滞在中は翻訳特集「海外文学専頁」（1940～41 年）で数々の海外文学を翻訳紹介した。満洲国において 1941 年から本格的な文化統制が始まると、文学の荒廃を危ぶんだ作家たちが『大同報』で新設された文藝欄「我們的文学」に結集したが、梅娘もここに日本から小説「女難」を寄稿している。太平洋戦争の勃発後、政府の統制が本格的に厳しくなっていくなか、1942 年に「我們的文学」が連載を終えると、それまで活躍していた満洲国文壇を代表する作家たちとともに、梅娘も『大同報』から姿を消すこととなった。

②『大同報』に掲載された作品のうち、梅娘が日本滞在期に発表した小説「女難」（1941 年 10 月 29 日）に着目し、検討を行った。この作品について従来の研究では、日本の国策への動員や、戦時の不景気による日本女性の抑圧された生活を描いたとしていたが、本研究はこの作品が日本の近代的なモダン世界を背景としていることに着目し、以下の点を明らかにした。

「女難」は梅娘が居住していた阪神間が舞台になっており、作品中には宝塚歌劇団やカフェ、女給が登場し、それを見つめる主人公の満洲国女性のまなざしが主な描写の対象となっている。とくに飾り立てた身なりの厚化粧の女給たちが満洲国に対する自分勝手で非現実的な幻想を語り出す姿と、それを見つめる主人公の冷ややかな視線に焦点が当てられていた。このことから、この作品はモダン世界を舞台に、中産階級の女性の目を通し、その近代文化の片隅に生きる弱く愚かな女性たちの姿を滑稽に描いたものであり、また同時に満洲国の中国人から見た、日本人の満洲国に対する身勝手な幻想が描かれていたといえる。つまり日本のモダン世界のなかに潜む闇――女性の困難、そして植民者のエゴイズムを二重に抉り出したものであったのである。

（２）日本における読書経験

梅娘の日本文学の翻訳作品である長篇小説 4 篇（久米正雄『白蘭の歌』、丹羽文雄『母の青春』、石川達三『母系家族』、細川武子『女学生記』）、満洲国訪問記 4 篇（長谷健「満洲でみた子供」、小田嶽夫「日本の延長？」、吉屋信子「広野の人々」、岡田禎子「北満の旅より寄せる」）について検討し、以下の点を明らかにした。

これらの作品はその原作がいずれも梅娘の日本滞在中に発表されたか、あるいは当時日本社会で話題になっていたものであることから、梅娘は日本でこれらの作品に触れたものと考えられる。とくに細川武子の翻訳作品はこれまで底本が不明であったが、本研究の調査により底本を確定するに至った。

以上の作品は、日本において新聞や当時を代表する雑誌等に連載されたものが多く、なかには映画化された作品も含まれている。このことからは梅娘が日本社会における大衆

的な教養に広く関心を抱いていたことが窺える。そしてそれらの中には、当時の日本社会の満洲国へのまなざしやモダン文化を色濃く反映する作品が存在しており、これらに対して梅娘が特別な関心を抱いていたことが見出せる。また中には日本の国策宣伝や愛国ナショナリズムの要素が潜んでいる作品も含まれており、そして作家の中には久米正雄、丹羽文雄、吉屋信子など当時従軍作家として活躍していた者も多く存在していた。こうした作品群に梅娘が日本滞在期に触れたということからは、彼女がモダン文化と総動員体制が並存する複雑な文化的環境のなかに在ったということがいえる。

（３）女性観の形成

梅娘の日本における読書経験のうち、女性をモチーフにした作品である石川達三『母系家族』、細川武子『女学生記』を取り上げ、これらが梅娘の女性観の形成にどのような影響を与えたのかを考察した。梅娘がこれら二作品を翻訳したことに対し、先行研究では相反する評価を下しており、梅娘が『母系家族』の翻訳を通じて女権拡張を叫んだとして高く評価する一方で、『女学生記』の翻訳により家庭に囚われた日本の主婦像や銃後の女性像を紹介したとし、梅娘の女性意識の混乱を指摘していた。これに対し、本研究ではこの二作品が「女性の近代化」という点で通底していたことに着目する。そして梅娘の日本における女性に関する経験を踏まえ、以下の点を明らかにした。

梅娘の滞在当時、日本では都市化や女子教育の普及により良妻賢母思想に基づく近代的主婦像を体現する女性が社会に広く出現しており、一方で総動員体制のもと女性の「母性」が強調され、その母性によって国家に貢献する銃後の女性像を称賛する言説が形成されていた。梅娘は日本滞在中、日本女性との交流を通じて、良妻賢母思想に基づいた日本の主婦像に深く共感しており、帰国後これを中国女性向けに紹介する文章を複数発表していた。

梅娘が日本で触れた『母系家族』と『女学生記』は、当時の日本社会で大きな反響を呼んでいた作品であり、いずれもモダンな恋愛ドラマや女学生文化を背景に、『母系家族』では母性保護を求める職業婦人、『女学生記』では女学生や近代主婦像といった近代女性の姿が描かれていた。それと同時に総動員体制のもとで関心が集まっていた「母性尊重」の精神や銃後の女性像が矛盾することなく組み込まれていた。このことから、これら二作品は当時のモダン文化と総動員体制が併存する時代性や、日本社会で形成されていた女性像を色濃く反映した作品であったといえる。その意味で、梅娘がこれら二作品に興味を抱き、それを翻訳したということは必ずしも矛盾する行為ではなく、その背景には国家や民族主義を越えた立場から同じ男性中心社会で生きる女性への共感や女性の近代化を求める切実な思いがあったのである。

（４）文学における日本イメージ

①梅娘が日本滞在期や帰国後において発表した日本を描いた作品を分析し、以下の点を指摘した。

梅娘は日本滞在後、その文学において日本を描いており、それは大きく二つの類型に分けられる。一つは満洲国を舞台とした作品群であり、「蟹」（『華文大阪毎日』7 巻 5 期～12 期、1941 年 9 月 1 日～12 月 15 日）、「一個蚌」（『満洲文藝』第１輯、1942 年 9 月）の二作品である。これらでは日本は満洲国の背後に潜む存在として描かれているものの、直接的な描写の対象にはなっておらず、具体的なイメージがつかみにくいものになっている。もう一つは日本を舞台にした作品群で、「僑民」（『新満洲』3 巻 6 期、1941 年 6 月）、「女難」（前出）、「異国篇」「話旧篇」（長篇小説『小婦人』の一部、『中国文学』1 巻 8・9 期、1944 年 8・9 月）の三作品である。ここでは満洲国の中国人の目を通した日本社会や日本人の姿が実に鮮明に描きだされている。

他の満洲国作家たちも作品中に日本を描くことはあったが、その殆どが満洲国を舞台にした作品で、その描き方は梅娘の満洲国を背景にした作品群と重なっている。しかし日本を舞台に作品を描くことは稀であり、あったとしてもその描き方が表層的に過ぎない場合が殆どである。これは当時にあって日本を正面から描くことが忌避されたためであろうが、そのなかで梅娘が日本を背景に三作品を創作しているのは極めて珍しいことであった。このことからは梅娘が日本を描くことに対して特別な思い入れがあったことが言える。

②本研究ではとくに特異な存在である梅娘の日本を舞台にした作品群「僑民」、「女難」、「異国篇」、「話旧篇」に着目し、そこに表出した梅娘の日本に対するイメージを読み解き、以下の点を指摘した。

梅娘の日本を背景にした作品群では、彼女が滞在していた当時のモダン世界が再現されている。そして主人公はその光芒の中に身を置きながら、日本の階層社会、日本人の満洲国に対する幻想、植民者としてのエゴイズムを見出している。それと同時に、主人公の近代的なモダン文化への順応や憧憬、それによって生まれるジレンマや葛藤、卑屈な心情もまた、日本の支配に対する鬱屈や抵抗意識と絡み合った形で描き出されている。

そして日本滞在期の作品である「僑民」や「女難」と、戦争末期の作品である「異国篇」「話旧篇」では、日本の描き方に大きく変化が生じていた。前者では梅娘の日本に対する眼差しは必ずしも明確ではなく、梅娘の視点にも日本社会と同化している部分が見られ

た。しかし後者では主人公の満洲国青年が日本社会と向き合う姿が描かれており、さらに満洲国と日本との間で葛藤する複雑な心理に深く踏み入っている。また前者では舞台が梅娘自らの生活圏であった阪神間であり、主人公も梅娘自身を投影したと思われる満洲国女性であったのに対し、後者では帝都東京を舞台としており、主人公も国家を憂える満洲国男性に設定されている。

こうした変化からは、梅娘が戦争末期に日本と接近するなかで、むしろ中国知識人としての意識を強め、日本社会と向き合い、そして満洲国と日本の関係性を模索し、それを自覚的に描きだそうとしていたことが窺える。このことから、これら作品群には、梅娘自身が日本の近代性と向かい合い、そのなかで中国知識人としてのアイデンティティを強めていく過程が映し出されていたといえる。

（５）満洲国知識人の日本経験と日本イメージ

①梅娘と同時期に日本に滞在した満洲国の女性作家である但娣の日本経験や日本題材小説との比較を行い、以下の点を明らかにした。

梅娘と但娣は同じく関西地方に居住し、またいずれも『華文大阪毎日』の同人であったことから、日本で親交を結んだ。日本滞在中ともに数々の翻訳や創作を発表し、作家としての地歩を築くに至る。帰国後、彼女たちは対照的な道を歩み、梅娘は日本占領下の華北文壇で活躍して大東亜文学賞を受賞し、但娣は満洲国で抗日運動に参加することとなる。彼女たちは、その文学で「日本」をたびたび描いており、それは（４）で取り上げた梅娘の作品のほか、但娣の「櫻花的季節」（1939 年 4 月）、「両地」（『華文大阪毎日』（3 巻 10 期、1939 年 11 月）、「異国」（『華文大阪毎日』4 巻 3 期、1940 年 2 月）、「血族」（『東北文学』1 巻 1 期、1945 年 12 月）がある。これらの作品には、彼女たちが同じように日本の二面性――帝国主義と近代性に向き合い、そのなかで中国知識人としてのアイデンティティを強めていく過程が映し出されている。

②梅娘と同時期に日本に滞在していた満洲国留学生の日本経験や日本認識についてとりあげ、梅娘の事例の特殊性や普遍性について検討した。従来の研究では、満洲国留学生の日本認識については検討されてこなかった。これに対し本研究では、日本の外交史料館や満洲国留日学生会会報、奈良女子大学所蔵校史関係史料に残されている満洲国留学生の日本見学旅行に関連する史料を取り上げ、彼らが書き残した旅行記を分析することにより、その日本認識を検証し、以下の点を明らかにした。

満洲国留学生は日本で目の当たりにした近代化や国民の精神的結束に関心を寄せ、そこに近代国家のモデルを見出しており、日本と中国との間で揺れる意識を抱いていた。彼らは日本滞在時、民族アイデンティティが矛盾する複雑な境遇に置かれており、その日本認識も多重性を備えていたのである。

以上の①、②の検討から、梅娘が日本滞在期において日本の近代性と帝国主義に直面し、また民族主義との間で葛藤するなかで中国知識人としてのアイデンティティを強めていったということは、当時にあって一定の普遍性があったことが明らかになった。

（６）本研究の位置づけと意義、今後の展望

近代中国の代表的な文学者は、その多くが日本に滞在した経験を持ち、日本文学から多大な影響を受けている。しかし従来の研究では、検討の対象が 1930 年代初頭までに来日した作家に限られており、梅娘のように満洲事変後、あるいは日中戦争勃発後に来日した作家については、これまで政治的な理由から検討がなされてこなかった。そのため本研究は中国文学における日中交流史を補完する意味をもつ。

さらに、それまで一面的な理解に偏ってきた被占領国作家の占領国体験について、ポストコロニアルの視点から捉えなおすことにより、豊富な読書経験、国家を超えた女性観の形成、近代体験と民族主義との相克、それによる民族アイデンティティの強化といった多様な要素を見出した。

また台湾や朝鮮といった東アジアの植民地の文学研究では、すでに作家の日本経験について近代性や民族主義の相克に着目した論考が登場しているのに対し、中国の日本占領地文学では検討されてこなかった。本研究はこの空白を埋めるものである。これにより中国・台湾・朝鮮の三地域の相互比較を可能にしたのであり、中国文学分野にとどまらず日本植民地文学の発展にも大きく貢献したといえる。

今後は、日本経験を通じて強められた梅娘の中国知識人としての自覚が、その後どのように日本占領下北京で体現され、戦後に引き継がれたのかを検討したいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 羽田朝子「梅娘の描く「日本」――昭和モダニズムの光芒のなかで」『日本中国学会報』69 号、日本中国学会、pp288－303、2017 年、査読有り

② 羽田朝子「梅娘等《華文大阪毎日》同人們的“読書会”――偽満洲国作家在日本時期的翻訳活動」『偽満洲国文学研究在日本』中国：北方文藝出版社、pp177－194、2017 年、査読無し、依頼有り

③ 羽田朝子「満洲国留学生の日本見学旅行記――在日留学生のみた「帝国日本」」濱田麻矢ほか編『漂泊の叙事』勉誠出版 、pp.329－350、2015 年、査読無し

④ 羽田朝子「梅娘の日本滞在期と『大同報』文藝欄――小説「女難」と梅娘の描く日本」『中国 21 』43 巻 、pp 189 － 206、 2015 年 、査読無し、依頼有り

〔学会発表〕（計４件）
① 羽田朝子「満洲国の女性作家・梅娘の日本経験と近代的主婦像」日本比較文学会東北大会、2017 年

② 羽田朝子「満洲国女性作家之日本留学経験：梅娘與但娣」国際シンポジウム「世界史中的中華婦女」国際学術研討会、台湾中央研究院近代史研究所、2017 年、審査有り

③ 羽田朝子「梅娘の描く「日本」――昭和モダニズムの光芒のなかで」日本中国学会大会、奈良、2016 年、査読無し

④ 羽田朝子「満洲国留学生の見た「帝国日本」――日本見学旅行記と在日留学生の日本認識」秋田中国学会、2014 年、査読無し

○出願状況（計　　件）
該当するものなし

○取得状況（計　　件）
該当するものなし

〔その他〕
ホームページ等
該当するものなし

６．研究組織

(1)研究代表者
羽田　朝子（HANEDA, Asako）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：90581306